



現在の能楽堂

現在、山本能楽堂は、公益財団法人として能を「現代に生きる魅力的な芸能」として普及・啓発する様々な活動を精力的に行っています。観世流の能楽の伝承はもちろん、初心者向けの公演、全国の子どもたちへの出前公演、体験講座、公共空間でのストーリーライブ能、アプリ開発などその活動は多岐にわたります。

二〇〇七（平成十八）年からは大阪市、大阪商工会議所、大阪観光局の協力により、能を含めた上方伝統芸能全体の情報発信の役割を担い、大阪の地域振興に寄与しています。また、現代アートとのコラボレーションによるユニークな活動も多く、造形遊びを通じた独創的な子どもたちへの能の普及活動もおこなっています。

二〇〇九（平成二十）年にはこどもたちと一緒に水の浄化をテーマに環境問題を考える新作能「水の輪」を初演し、以来国内外で十八回再演を行い、能の現代社会における可能性を追求しています。

近年は東ヨーロッパを中心に能の海外公演も精力的に行い、その活動が認められティファニー財団日本文化大賞、国際交流基金地球市民賞、はなやか関西インバウンド賞、外務大臣表彰など数々の賞を受賞しました。



現在の鏡板



外観



音響効果を高める舞台下の瓶

現在の山本能楽堂は、大阪のオフィス街に佇む、杜のような能楽堂です。扉を開けると周りの喧騒からは想像できない異次元空間が広がっており、初めて来られた方はその精緻な雰囲気驚かれます。

舞台は創設以来、長い年月の間に磨かれ、黒光りし、どっしりとした重量感があります。

客席（見所）は、一、二階とも棧敷席の舞台椅子席で、始めてこられた方でも、なにか懐かしく落ち着いた気分を感じて頂けます。音響効果をよくするため、舞台下には大きな瓶が十二個置かれています。現在新しく作られる舞台には瓶が埋められることはほとんどなく、今では珍しいものとなりました。（見学可能）

山本能楽堂は九十年以上「大阪・谷町の能楽堂」として地元の皆様へ愛され、お守り頂き、大阪における能の振興に携わってきました。これからも、六五〇年連続と続く能の歴史の中で、「今」の時代を担う責務として能楽の普及・啓発につとめ、未来へと能楽を継承していく所存でございます。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。

公益財団法人 山本能楽堂（国登録有形文化財）



大阪メトロ谷町線・中央線「谷町四丁目駅」4番出口より谷町筋に沿って北へ、1筋目（ホテルサンホワイト）手前を左折、1筋越えてすぐ左手。

大阪市中央区徳井町1-3-6
電話 06-6943-9454
ホームページ
<http://noh-theater.com>

大阪メトロ谷町線・中央線「谷町四丁目駅」4番出口より谷町筋に沿って北へ、1筋目（ホテルサンホワイト）手前を左折、1筋越えてすぐ左手。

山本能楽堂の歴史

山本能楽堂は一九二七（昭和二年）に山本家十代目・山本博之によって創設された木造三階建の能楽堂です。太閤秀吉によって築かれた大坂城の武家屋敷エリアに当時の町割のまま位置し、建物の西側には熊野街道が通り、今も昔も大勢の人が行き交います。

山本家は信州山本城主諏訪盛重に発し、初代七郎右衛門が元禄年間に京都へ出て、京都・烏丸三条で伊勢屋と称した大名貸の両替商を営み、五大両替商の一つとして指折りの身代になりました。東京遷都にあたっては、三井、下村、熊谷等とともに資金を献納したことが、徳富蘇峰「明治維新史」に書き記されています。また、祇園祭の鈴鹿山には、享保三年に山本家が寄贈した能面がご神体として今も使用されています。

博之の父、九代目弥太郎（雅号・天麗）は伊弉弥銀行を設立し、長く京都市会議員をつとめ、京都市電敷設等に尽力しました。しかし、友人の借財の保証人として裏印をし、友人が逃走したため責めを負い、一切を放棄して邸を出て、大阪へと移り住みました。

先代博之（本名は重三郎）は、明治二十八年、弥太郎の長



父 伊勢屋弥太郎旧邸（博之の生家）



七郎右衛門の代、両替商を営んでいたときの鬼瓦



昭和二年建設の戦前の能楽堂



昭和四十三年 叙勲記念

男として出生し、大正四年、二十歳の時、能楽の極め尽くせない奥深さにひかれ、二十四世観世宗家に入門しました。

そして、現在地大阪市東区徳井町一丁目に、念願の「観世會舞台（現・山本能楽堂）」を設立し、昭和二年十一月十六日に、二十四世観世宗家左近先生をお迎えして舞台披きを行いました。

大阪は当時「大坂」と呼ばれ、史上空前の賑わいを見せた時代であり、謡曲を嗜む方も多く、「文化的な社交場」をつくることを目的に船場の旦那衆によって山本能楽堂が建てられ、能楽を通して大勢の人々が交流を深めてきました。

しかし昭和十六年、太平洋戦争が勃発し、一九四五（昭和二十年）三月十三日に、夜の大坂大空襲ですべて焼失しました。戦争中も舞台をつとめた博之は、「能とはこんななものか。秀吉が陣中で舞ったのも無理がないと思う」という言葉を残しています。昭和二十一年には焦土と化した大阪で「最高の能楽を鑑賞芸事の向上を致すべく」「山本能楽会」を興し、能の普及につとめます。昭和二十二年の



昭和二年 舞台披き



上様式の日 千歳直垂姿 浜田豊太郎氏



昭和二十五年当時の山本能楽堂

「江口」では大阪府芸術祭賞を受賞しています。

そして、がれきの山の中で、「もう一度谷町に能楽堂をつくりたい」という船場の旦那衆や市民の熱意によって、一九五〇（昭和二十五年）年に山本能楽堂が再建されました。支援者には、松下幸之助や田村駒治郎、武智鉄二らが名を連ねました。